



Title	ベトナム語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の接触場面の雑談における間の分析：日本語母語話者による反応の不在に着目して
Author(s)	下本, 有美香
Citation	グローバル人文学研究交流会要旨集. 2025, 1, p. 63-66
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100488">https://doi.org/10.18910/100488</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ベトナム語を母語とする日本語学習者と 日本語母語話者の接触場面の雑談における間の分析 —日本語母語話者による反応の不在に着目して—

下本有美香 (日本学・M2)

## 1. はじめに

近年、日本語学習者は増加の一途をたどり、その背景も多様化している。同時に、日本に住み、日常生活において日本語でコミュニケーションを行う日本語非母語話者も増加している。出入国在留管理庁の統計結果によると、令和6年6月末現在国内には358万8956人も在留外国人が生活をしており、前年末と比べ5%強増加している。このうち600,348人をベトナム出身者が占めており、国籍・地域別では中国出身者に次ぐ第二位の人口である。

筆者は日頃から日本語学習者と日本語で話す機会に恵まれているが、接触場面と母語場面での間の現れ方に何となく違いを感じている。「間」は非流暢性の一つの形態である。母語話者の会話であっても必ずしも流暢に会話が展開されず、寧ろ非流暢であることの方が自然であるという指摘がある(須藤他, 2022 など)。非流暢性は、様々な分野で研究がなされており、フィラーや語句の繰り返しなどと深く関わるとされ、コミュニケーション上の機能が明らかにされてきている(伝ほか, 2009)。更に須藤(2022)によると、聞き手を指向する非流暢性は対話性の向上に結びつき、非流暢的な要素が会話中で適切に表れることによってより効果的な発話になりうる。しかしながら、非母語話者の発話に見られる非流暢性と母語話者の発話に見られる非流暢性は質的に異なるものであるようである。非流暢性が効果的なコミュニケーションを行う上で大切な要素であり、且つ母語話者と非母語話者とで質的に異なるということは、学習者が日本語のコミュニケーションについて学ぶ際に十分な指導を要するということである。ニーズが多様化する日本語教育においてその前提として、日本語会話の非流暢箇所では何が行われているのかを明らかにすることは非常に意味深いことであろう。

間に関連する先行研究で、接触場面を扱ったもの、またそこでの反応の不在に着目したものは管見の限りない。他言語でのコミュニケーションについて考える際、言語能力だけでなく文化的背景など様々な要因による影響を考慮する必要がある(難波, 2018; 岩田, 2005 など)。しかし現状の日本語接触場面に関する研究では学習者の母語が統一されておらず、彼らの母語や文化的背景からの影響を考慮していないものが多い。たとえ非母語話者の母語が統一されているとしても、日本語接触場面では中国語母語話者、韓国語母語話者、英語母語話者など元来日本語学習者が多いとされてきたグループを対象とした研究が多く、ベトナム語母語話者に着目したものはまだ少ない。

そこで本稿では、非流暢性の特徴の一つである「間」に着目し、ベトナム語母語日本語学習者との接触場面、母語場面において間があることで何が成し遂げられているのか、会話分析の手法を用いて明らかにすることを旨とする。

## 2. 分析方法

本研究では日本語自然会話の映像資料とその文字化資料を分析データとして用いる。接触場面会話3例、母語場面会話3例、計6組の会話をビデオ録画した。会話はすべてパソコン内蔵のカメラ機能によって録画され、会話音声以外にも会話参加者全員の表情やうなずき、ジェスチャーなどの非言語的要素も記録されている。録画の際、会話参加者同士は横並びで座り、やや向き合うような向きで正面にパソコンを置き、撮影に臨んでもらった。録画した会話は日本語の自然会話ではあるが、「初めは自分の旅行についての経験を話す」という設定を設けた。これは、ナラティブという行動を含んだ会話を収集するためであり、「旅行」というテーマは多かれ少なかれ皆旅行を経験したことがあり、比較的話しやすいテーマであると判断し採用した。調査依頼にあたっては、接触場面は学習者に、母語場面では各会話参加者のうち1名に、「親しい日本語母語話者の友人1人と参加するように」依頼した。よって「親しい友人」の定義が各人によって異なり、統一されていないことが本データの限界であると断っておく。

収集したデータは全て文字化し、話し手の語りに見られる0.4秒以上の沈黙を手動で抽出したのち、それらを間が生じた原因だと思われる要素に基づいて①反応機会場、②発話中のトラブル(言葉探し、説明の仕方の思考、事象の振り返り、整理)に分類した。本研究では河野(1992)を参考に「間」を「発話と発話の間に発生する0.4秒以上の時間間隔」と定義し、うなずきや表情の変化などの非言語的要素を含む聞き手からの反応が見られなかった間のみを研究対象としている。

分析においては、会話参加者の視線、所作、言語ホスト性をはじめとする意識を考慮しながら、聞き手の反応の不在によって生じた間を含んだ会話の断片について、詳細に記述する会話分析の手法を用いて考察を行った。また、本稿では「間」を相づちをはじめとする反応の欠如と捉えるため、相づちの機能も分析において参照した。今回は、紙幅の都合上「言葉探し」についてのみ扱う。

### 3. 結果

「言葉探し」とは、話し手が語りを行う際により適切な表現を探したり、特定の単語が思い出せないなど、表現に関するトラブルのことを指すことにする。

#### 3.1 接触場面の「言葉探し」における反応の不在

接触場面の「言葉探し」における反応の不在の主な原因は「聞き手である日本語母語話者にとって先取りなどのサポートが難しい」ことで、反応が示せないために間が生じていると考えられる。Lerner(1991)が述べるように、共同発話の特徴は後続部の内容及び共同発話全体の構造が予測可能なことであるため、後続部の内容が予測できないものは共同発話になりえないのだろう。更には非母語話者である話し手側の話し方によって話の解釈が困難になり、後続部分の予測が難しくなったと思われる事例があったが、これは接触場面特有の要因である。

表 1：チューターとの揉め事（非母語話者：VF3<sup>2</sup>，母語話者：JF3）

102	VF3	先生に連絡してて；
103	JF3	ん。
104	VF3	私が (0.3) まあそ( )そん( )そんれにめっちゃ怒ってて； =
105	JF3	=ん：。
106	VF3	先生にきって、
107	JF3	ん。
108	VF3	今( )チューターをかえても - 変更してもい：い？
109	JF3	うん。
110	VF3	言ってみたんで、
111	JF3	° ん°
112	VF3	で先生は：(0.3)じゃ先生：は (0.3) そのチューターに：( )話してみて( )その後キャンセルするか( )どうか (0.3) え：と( )考えて° みます°
113	JF3	うん。
→114	VF3	>でも<直接に言 <del>って</del> ：>ちょとは< (1.2) も：私悪い：[てから：；
115	JF3	[うんうんうん。
116	VF3	あ大丈夫大丈夫。

断片 1 は、VF3 が「去年のチューター」との出来事について話始める場面である。チューターとのトラブルについて先生に相談した際のやり取りについて話すが、112VF3 では「で先生は：(0.3)じゃ先生：は (0.3) そのチューターに：( )話してみて( )その後キャンセルするか( )どうか (0.3) え：と( )考えて° みます° 」と先生のセリフと状況説明の文脈が入り混じるような話し方になっている。直後の 114VF3 では今度は VF3 の考えを「>でも<直接に言~~って~~：>ちょとは< (1.2) も：私悪い：てから：； 」と同じ調子で話している。声色も変えずに同じ調子で話しているため、この部分は「私悪い：

<sup>2</sup> 調査協力者の名前は、任意の英数字で匿名化している。接触場面については国名と性別の頭文字に加え、収集日の古いデータの調査協力者から順に通し番号をつけた。

ベトナム語母語話者：VF (Vietnamese-Female)，日本語母語話者：JF (Japanese-Female)

母語場面では、会話において先に自らの経験を話し始めた方を話し手 JS (Japanese-Speaker)，後で経験について語った人、あるいは話さなかった人を JL (Japanese-Listener) と名付けた。数字はデータを収集した順番である。

てから：」という言葉が来るまでは先生のセリフの続きのようにも聞こえる。前後の文脈からこの部分も含め VF3 の考えであったことがわかるのであるが、そうであるなら「直接に言って：」ではなく「直接に言ってしまうと」のような言い方の方がわかりやすい。セリフと語りの部分での語り方の不適切さ、また「直接に言って：」というミスにより、話が伝わりづらく共同発話に至らなかったのではないかと考えられる。

母語場面では見られなかった現象として、聞き手による自問発話がある。音の引き伸ばし(143VF4,146VF4 など) や言い淀み (148VF4, 152VF4) が目立ち、発話者の苦労が垣間見られる発話において、一定の間があった後で母語話者が「なんていうんやろ」(156JF4) と話し手に寄り添う姿勢を見せ、話し手の言葉探しをサポートする例があった(断片 2 を参照)。これは、澤(2023)で指摘されるように「語り手である日本語非母語話者の語りの成功を手助けするという意識が強く働いた」ために「発話継続」を試みるのではなく、自問発話を発するという処置をとったのではないかと考えられる。

### <断片 2>白塗りの壁 (非母語話者：VF3, 母語話者：JF3)

143	VF4	白塗り壁[ (0.3) という表現は：,
144	JF4	うんうん。
145	JF4	うん。
146	VF4	ベトナム語だったら：,
147	JF4	うん。
148	VF4	>なんか<もし：厚い：(.)め - 厚い化粧？
149	JF4	うん。
150	VF4	する人は：,
151	JF4	うん。
152	VF4	え：°ん° なんか。
153		(1.0)
154	VF4	ん： (0.7) にほ - ベトナムの：,
155		(1.0)
→156	JF4	なんていうんやろ。
157	VF4	なんていうかな(.)歌舞伎みたい？
158	JF4	hhh 歌 (h) 舞 (h) 伎 (h) み (h) た (h) い hhh[hh わかる.hhh.

### 3.2 母語場面の「言葉探し」における反応の不在

母語場面の「言葉探し」における反応の不在の要因は、接触場面における場合と同様に聞き手が話し手の語りの後続部を予測するのが困難であり、結果反応が得られないというものである。更に接触場面には見られなかった特徴として、話し手の視線が挙げられる。杉浦(2022)によると相手に視線を向けることで、相手に対して言葉探し活動への参加を促すことができ、ここでは聞き手が話し手に視線を向けないことで話し手の「言葉探し」への参加が難しくなっていると考えられる。

接触場面での「言葉探し」に比べ、母語場面では生じている間の長さが比較的長く、聞き手は話し手の顔をじっと見たままであるケースも多い。串田(2009)は相づちについて聞き手の語りの継続を支持するという促しの機能も持つことを指摘している。母語場面では「言語ホスト」「言語ゲスト」という立場の不均衡性は見られず、互いに母語話者として認められる立場にある。しかし「相手の話を促す」機能を有する相づちを過度に用いると、聞き手に「急いでいる」という認識を持たせてしまい(串田, 2009), 更には会話参加者の間に会話を「助ける者 - 助けられる者」という非対称的な立場が生まれてしまうかもしれない。同じ日本語母語話者としての立場を尊重するために、聞き手は相手の「言葉探しに起因する間」では敢えて反応を示さないことによって必要以上の会話の促しを回避していると思われる。

### <断片 3>テーマパークのアトラクション (会話参加者：JL2, JS2)

336	JS2	スリ - スリーディーのやつ。
337		(0.3)
338	JL2	スリ - スリーディー？
339	JS2	ん：.

340	JL2	えい - 映像 : えい - 映像 :
341	JS2	>たぶく何もかけんくても大丈夫.
342	JL2	あ( ) そうな そうな( ) 普通にもう( ) [° (て : ) ° ]
343	JS2	[で : ] うん.
→344		(1.0)
345	JS2	>あれみたい <それこそハリーポッターみたいな° 感じ°
346	JL2	あ : [ : .
347	JS2	[あれはこ : めっちゃ回転するけど [ : ( ) ] あそこまでは激しくない.
348	JL2	[° うんうん.° ]

断片 3 では、テーマパークへ行った時に乗ったアトラクションについて JS2 が思い出しながら羅列する。342JL2 の「あ( ) そうな そうな( ) 普通にもう( ) ° (て : ) ° 」という確認に対し確認を与えた直後 (343JS2) , JS2 は目を上に、その後左に動かして自らの中で確認をするような表情をして「あれみたい」と説明を追加している。その間 1 秒間の比較的長い間があいたが、JL2 はじっと JS2 の顔を見たま話の続きを待っていた。

#### 4. 今後の展望

本稿では、話者交替を伴わない話し手の語りの中にある間のみ焦点をあてた。間の解釈は多様であるため、相互行為中での出現位置や状況など様々なパターンの間について今後考察が求められる。更にベトナム語母語場面との比較ができると、日越の言語や文化との相違が見え、より教育への応用が目指しやすくなると考えられる。また、ベトナム語に限らず他の諸言語についても同様であり、より広い視点で分析が可能になるだろう。

またコミュニケーション研究への新たな視点の提供が期待される。日本語の非流暢性についての研究はまだ進んでいないとは言えない。今回、非流暢性の一形態としての「間」に着目しながら会話参加者が間を用いて何を成し遂げようとしているのかを考察できたことは、今後コミュニケーションに関する研究に新たな見方を提供することができるだろう。コミュニケーションにおける非流暢性についての研究が進めば、その成果が日本語教育に応用され、コミュニケーション上の働きを有する非流暢性の指導にも繋がると考える。

#### 参考文献

- 伝康晴・渡辺美知子 (2019) 「音声コミュニケーションにおける非流暢性の機能『音声研究』13(1), pp.53 - 64
- 広松真紀・松本一美・深田淳 (2019) 「日本語学習者と母語話者における非流暢性の比較研究」『CAJLE Annual Conference Proceedings』, pp.88-97
- 岩田夏穂 (2005) 「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化：非対称的参加から対称的参加へ」『世界の日本語教育.日本語教育論集』15, pp.135-151
- 河野守夫 (1992) KAKEN - 研究課題をさがす | 話しことばの認識と生成におけるリズムの役割 (KAKENHI-PROJECT 03208203)
- 串田秀也 (2009) 「聞き手による語りの進行促進—継続支持・継続促進・継続試行—」Cognitive Studies16(1), pp.12-23
- Lerner, G. H. 1991. "On the Syntax of Sentences-in-Progress."Language in Society 20,441-458.
- 澤恩嬉 (2023) 「接触場面の語りの談話における日本語母語話者の聞き手調整行動」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部教育研究』13, pp.59-76
- 須藤潤・定延利之・船橋瑞貴 (2022) 「日本語学習者のオンライン発話における「対話性」向上と非流暢性 - 読み上げ音声による予備的考察 - 」AJE 第 25 回シンポジウム口頭発表
- 杉浦秀行 (2022) 「聞き手による言葉探しへの参入と援助一定型表現「なんだっけ」に後続する言語的・非言語的描写に着目して」